

# 束縛原理をめぐる

有元 將剛

## Abstract

This paper attempts to account for some facts about binding which was not dealt with in Arimoto and Murasugi (2005). In particular, facts pointed out by Cantrall (1974) and Kuno (1984) are discussed. Cantrall claims that in *The adults, in the picture are facing away from us, with the children placed behind themselves, / them*, the sentence is unambiguous if a reflexive pronoun is used, and it is ambiguous if a pronoun is used. Kuno discusses similar cases. As far as I know, these facts have not been discussed from the perspective of Binding Theory. I argue that the facts follow from Binding Theory A and B if these sentences are considered to contain either a Small Clause or a VP Shell. I further argue that Kuno's Semantic Constraint on Reflexives is not needed if Binding Theory A and B are posited.

## 1. はじめに

代名詞が文のどのような位置に生起可能で、どのような位置には生起不可能かについては生成文法の枠組みで長い間議論されてきた<sup>1)</sup>。Reinhart (1979, 1983) は c 統御の概念を使うと代名詞の生起可能性の説明に線的順序 (linear order) に言及する必要がないと主張した<sup>2)</sup>。

---

1) 本稿は有元・村杉 (2005) の第 I 部「束縛」で扱えなかったことを扱うものである。

2) Chomsky (2008: 139) は Reinhart (1979) に言及して C-I interface の生成には線的順序は関わっていないと主張する。

- (1) a. After John Adams<sub>i</sub> woke up, he<sub>i</sub> was hungry.  
b. After he<sub>i</sub> woke up, John Adams<sub>i</sub> was hungry.  
c. John Adams<sub>i</sub> was hungry after he woke up.  
d. \*He<sub>i</sub> was hungry after John Adams<sub>i</sub> woke up.
- (2) a. 節点 A を支配する最初の枝分かれ節点が B を支配する場合、  
A は B を c 統御する。  
b. ある DP は、その c 統御領域にあるすべての DP（但し代名詞  
は除く）と非同一指示的と解釈される<sup>3)</sup>。(A の c 統御領域とは、  
A によって c 統御されるすべての節点をいう。)

(1d) で *he* と *Adams* は (2) により非同一指示的と解釈される。Chomsky (1993) の定式化した束縛原理 C も (2) と実質同じである。(束縛原理 A と B は後で議論する。)

- (3) a. 束縛原理 A：もし  $\alpha$  が照応形であるならば、領域 D において  $\alpha$  を c 統御する句と同一指示的であると解釈せよ<sup>4)</sup>。  
b. 束縛原理 B：もし  $\alpha$  が代名詞類であるならば、領域 D において  $\alpha$  を c 統御するすべての句と非同一指示的であると解釈せよ。  
c. 束縛原理 C：もし  $\alpha$  が指示表現であるならば、 $\alpha$  を c 統御するすべての句と非同一指示であると解釈せよ<sup>5)</sup>。

---

3) Reinhart は NP を使っていたが、本稿では DP 表記で統一する。

4) Chomsky (2008) では束縛原理 A は probe-goal の Agree 操作であると捉え直されている。

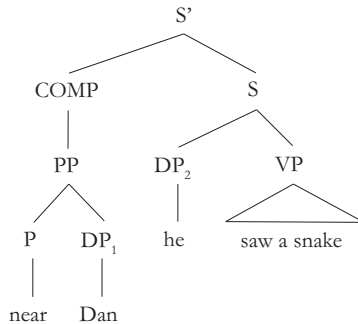
5) 束縛原理 C には指示表現が代名詞に束縛される場合と別の指示表現に束縛される場合がある。本稿は指示表現が代名詞に束縛される場合のみ扱う。指示表現が代名詞に束縛される場合と別の指示表現に束縛される場合の統語的相違については有元・村杉 (2005) を参照されたい。また Chomsky (2008) では、束縛原理 C は probe-goal の関係と捉え直

さらに, Reinhart は, (4) の言語事実を (2) を使って次のように説明する。  
 Reinhart は (2a) の c 統御の定義に (5) を補足する。そして Reinhart は (4a, b) はそれぞれ (6a, b) の構造をしていると考える。

- (4) a. \*Near Dan<sub>i</sub>, he<sub>i</sub> saw a snake.  
 b. Near him<sub>i</sub>, Dan<sub>i</sub> saw a snake.

- (5) A を支配する最初の枝分かれ節点  $\alpha_1$  が B を支配している節点  $\alpha_2$  に直接支配されていて, かつ  $\alpha_1$  と  $\alpha_2$  が同一タイプの範疇である場合も, A は B を c 統御すると考える。

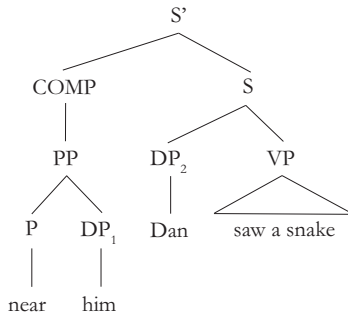
- (6) a.




---

されている。

b.



SとS'は同一タイプの範疇と考えられるので、(6a)で *he* は *Dan* を c 統御する。(線の順序は関係ないことに注意されたい。)従って、(6a)において、*he* と *Dan* は非同指指示的とされる。(6b)において、*Dan* は *him* を c 統御する。しかし、*Dan* の c 統御領域にあるのは *him* という代名詞であり、(2b) (そして(3c)も) は適用しない。従って、*Dan* と *him* は非同指指示的であると判断されない。

## 2. 束縛原理 C

有元・村杉 (2005) は Reinhart の (2b) ならびに Chomsky の束縛原理 C は正しいと思われるが、(4a, b) についての説明は Reinhart の説明とは違う、より幅広い説明力を持つ説明があると主張する。(4a, b) 以外の例も検討しよう。(7) で *him* は目的語位置にあり、*John* を c 統御しない。しかし、*him* と *John* が同一指示であるという解釈を得るのは難しい。

(7) ??In John's<sub>i</sub> bed, Sam puts him<sub>i</sub>. (Solán 1983: 52)

さらに (8) でも *he/she* は補文の中にあり、*John/Mary* を c 統御しない。しかし、

(8) の各文で *he* と *John* あるいは *she* と *Mary* が同一指示的であるという解釈を得ることはできない。

- (8) a. \*Near John<sub>i</sub>, Bill said [<sub>IP</sub> he<sub>i</sub> saw a snake] (Lebeaux 1988: 403)
- b. \*In John's picture of Mary<sub>i</sub>, I think [<sub>IP</sub> she<sub>i</sub> found a scratch] (Guéron 1984: 144)

次に、(9) の文を考えよう。(9a) において *John* と *he* は Reinhart の予測通り非同一指示的である。また、(9b) も Reinhart の予測通り *Mary* と *her* は同一指示的である。しかし、(7) と (9b) は一見同じように見えるが、(7) は容認できない。(10) のように同じような対比が他の文でも見られる。

- (9) a. \*In John's<sub>i</sub> apartment, he<sub>i</sub> smokes pot. (Lakoff 1968: 2)
- b. In Mary's<sub>i</sub> apartment, a thief assaulted her<sub>i</sub>. (Lakoff 1968: 5)
- (10) a. Next to Mary's<sub>i</sub> house, John kissed her<sub>i</sub>. (MaCawley 1998: 357)
- b. \*Next to Mary's<sub>i</sub> house, John found her<sub>i</sub>. (*ibid.*)

これらの文についての言語事実を Reinhart の枠組みでは説明できない。有元・村杉(2005)は、Chomsky の束縛原理 C(これは上述のように Reinhart の(2b)と実質同じである。)の適用方法について 2 つの仮定をした。Chomsky(1993)は束縛原理 C は LF で適用すると主張する。しかし、Lebeaux (1991, 1998, 2009) は、束縛原理 C は派生のすべての段階で適用すると主張する。この Lebeaux の考えを修正して取り入れる。特に、Lebeaux は移動後の語彙挿入を仮定しているが、「すべての段階」の概念を精緻なものにすれば、移動後の語彙挿入を仮定する必要がないと主張する。

Lebeaux は、束縛原理 C が派生のすべての段階で適用すると考えると、(12a, b) は NP 移動前に (13a, b) のような構造を持ち、*John* が *him/himself* に c 統

御され, (14) と同じように *John* と *him/himself* が非同一指示的になるはずであり, 問題となると述べる<sup>6)</sup>。

- (12) a. *John*'<sub>i</sub> mother seems to him<sub>i</sub> to be wonderful.  
b. *John*<sub>i</sub> seems to himself<sub>i</sub> to like cheese.
- (13) a. [            [seems [[to him] [*John*'s mother to be wonderful]]]]  
b. [            [seems [[to himself] [*John* to like cheese]]]]
- (14) \* It seems to him<sub>i</sub> that *John*'<sub>i</sub> mother is wonderful.

そして Lebeaux は *John's mother/John* が NP 移動の時には束縛原理 C に関し「あたかもなかったように」振る舞うと考え, その直感を反映するため, 語彙挿入は A 移動の後でも (但し, A' 移動の前) できると主張する。すなわち, A 移動の前には *John's mother/John* は挿入されておらず, *pro* が存在すると主張する。(15a, b) が生成され, A 移動の後に (16) になる。そして *John's mother/John* が挿入されて (17a, b) になる。

- (15) a. [            [seems [[to him] [*pro* to be wonderful]]]]  
b. [            [seems [[to himself] [*pro* to like cheese]]]]
- (16) a. [*pro* [seems [[to him] [*t* to be wonderful]]]]  
b. [*pro* [seems [[to himself] [*t* to like cheese]]]]
- (17) a. [*John*'s mother [seems [[to him] [*t* to be wonderful]]]]  
b. [*John* [seems [[to himself] [*t* to like cheese]]]]

これに対し, 本稿では次のように考える。Chomsky (2000, 2001) でフェイズという概念が導入された。CP と *v*\*P (そして多分 DP) がフェイズである。

---

6) (12a, b) で *him/himself* は前置詞 *to* の補部であるが, (14) で *him* と *John* が同一指示的に慣れないことから分かるように, 補文の中まで c 統御すると考えられている。

そして、あるフェイズの指定部と主要部だけがそのフェイズの外に操作に関わることができるという PIC (Phase-Impenetrability Condition) が提案された。すなわち、フェイズは移動などの操作の範囲を規定するものであった。しかし、南谷 (2001) は操作の範囲を規定するフェイズも束縛理論に関わるのではないかと考え、束縛領域をフェイズという概念で捉えている。有元・村杉 (2005) は、その直感を取り入れ、束縛原理 C はフェイズごとに適用すると仮定した。

(18) 束縛原理 C はフェイズごとに適用する。

Lebeaux は、束縛原理 C は派生のすべての段階で適用すると考える。しかし、本稿は派生のすべての段階ではなく、フェイズでのみ適用すると考える。(12a) をもう一度考えよう。(19) として再掲。)

(19) John's<sub>i</sub> mother seems to him<sub>i</sub> to be wonderful. (= (12a))

ミニマリストプログラムでは、併合がすべて終わってから移動が始まるのではなく、併合と移動が自由に適用してだんだん大きな構造を造っていく。補文の IP まで進んだ段階を (20a) として示す。次に *seem* が併合され、(20b) となる。Chomsky (1995: 305) は *seem* は軽動詞 *v* を含む VP シェルの構造を持つと述べる。V として *seem* が併合される。次に VP 指定部に *to him* が併合される。

- (20) a. [<sub>IP</sub> John's mother to be wonderful]  
 b. [<sub>VP</sub> [<sub>V</sub> seem] [<sub>IP</sub> John's mother to be wonderful]]  
 c. [<sub>VP</sub> [to him] [<sub>V'</sub> [<sub>V</sub> seem] [<sub>IP</sub> John's mother to be wonderful]]]

この段階で *him* は *John* を c 統御している。しかし、この段階は VP であり、フェイズではない。従って、この段階では束縛原理 C は適用しない。次に v が併合される。そして *seem* が v へ上昇する。*seem* の vP もフェイズと考えると、*John's mother* が vP 指定部へ上昇する。

- (21) a. [<sub>v</sub> seem [<sub>VP</sub> [to him] [<sub>V'</sub> [<sub>V</sub> *t*] [<sub>IP</sub> John's mother to be wonderful]]]]  
 b. [<sub>VP</sub> [John's mother] [<sub>V'</sub> [<sub>v</sub> seem] [<sub>VP</sub> [to him] [<sub>V'</sub> [<sub>V</sub> *t*] [<sub>IP</sub> *t* to be wonderful]]]]]]]

*seem* 類の vP をフェイズと考えると、束縛原理 C はこの段階（すなわち (21b) の段階）で適用する。この段階では *him* は *John* を c 統御していない。従って、束縛原理 C 違反はない。なお、*seem* 類の vP はフェイズではないとすると、(21b) の段階を経ないで、(21a) から直接 (22) に進む。(22) で束縛原理 C が適用しても *John* は *him* に c 統御されていない。いずれにしろ、移動後の語彙挿入という考えを採用しなくても、(19) は正しく説明できる。

- (22) [<sub>IP</sub> John's mother [<sub>I'</sub> pres [<sub>VP</sub> [<sub>v</sub> seem] [<sub>VP</sub> [to him] [<sub>V'</sub> [<sub>V</sub> *t*] [<sub>IP</sub> *t* to be wonderful]]]]]]]

(5) を持つ束縛原理 C で (4), (7)~(10) の事実をどのように説明できるか考察する。そして、代名詞が目的語位置にある時、前置された PP の中にある DP と同一指示になる場合と同一指示にならない場合を分けて考察する。最初に代名詞が目的語位置にある時に、前置された PP の中にある DP と同一指示にならない場合を考察する。(4a, b), (7), (8a, b), (10b) を (23a, b), (24), (25a, b), (26) として再掲する。

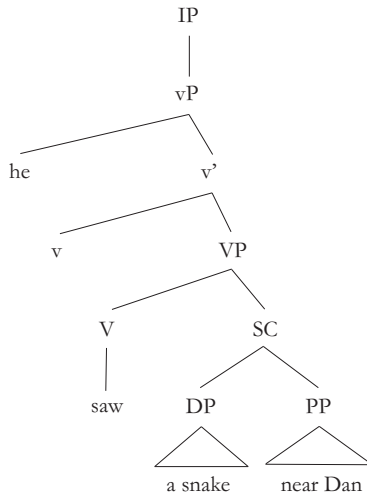
- (23) a. \*Near Dan<sub>i</sub>, he<sub>i</sub> saw a snake. (= (4a))



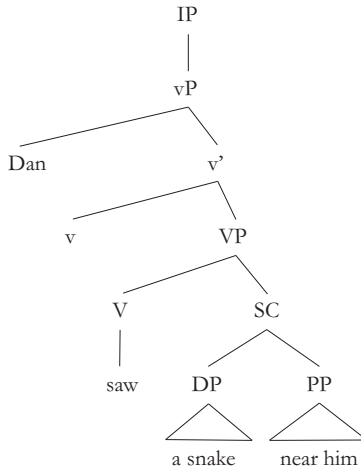
- b. Near him<sub>i</sub>, Dan<sub>i</sub> saw a snake. (= (4b))
- (24) ??In John's<sub>i</sub> bed, Sam puts him<sub>i</sub>. (= (7))
- (25) a. \*Near John<sub>i</sub>, Bill said [<sub>IP</sub> he<sub>i</sub> saw a snake] (= (8a))
- b. \*In John's picture of Mary<sub>i</sub>, I think [<sub>IP</sub> she<sub>i</sub> found a scratch] (= (8b))
- (26) \*Next to Mary's<sub>i</sub> house, John found her<sub>i</sub>. (= (10b))

(24) を除いて、これらは *see*, *find* という知覚動詞を含む文である。例えば、(23b) は、「ダンは彼の近くに蛇を見た」という意味で、*near him* は蛇のいる場所を示す。すなわち、*a snake* と *near him* の間には主語と叙述の関係があり、この2つで小節 (Small Clause) を構成すると考えられる。(23a, b) は、前置詞句が前置される前の段階では (27a, b) の構造を持つ。

- (27) a.



b.



なお、表記しなかったが小節には *be* 動詞に相当する音形のない連結詞がある  
と考える。Legate (2003) に従い、非対格動詞句はフェイズであると考え  
る。(27a, b) には主節の他に SC と vP という 2 つのフェイズがある。(27a)  
では SC のフェイズでは何も起こらない。次に vP のフェイズで *Dan* は *he* に  
c 統御されている。この段階で *Dan* と *he* は非同一指示であると判断される。  
すなわち、*he* の IP の指定部への移動と *near Dan* の前置前の段階で束縛原理  
C が適用されるのである。(27b) を検討する前に Chomsky (1993) の束縛原  
理 A と B に触れる。(3a, b) を (28a, b) として再掲する。

- (28) a. 束縛原理 A : もし  $\alpha$  が照応形であるならば、領域 D において  
 $\alpha$  を c 統御する句と同一指示的であると解釈せよ。(= (3a))
- b. 束縛原理 B : もし  $\alpha$  が代名詞類であるならば、領域 D におい  
て  $\alpha$  を c 統御するすべての句と非同一指示的であると解釈せ  
よ。(= (3b))

領域 D はフェイズであると考え、また束縛原理 A, B も束縛原理 C と同じように、フェイズごとに適用すると考える。(27b) において SC のフェイズの中で *him* を c 統御する句はない。また、*him* は束縛原理 A に違反しない。従って、*him* は *Dan* を指すこともできるし、他の男性を指すこともできる。

また、(25a, b) と (26) も同じ説明ができる。(25a, b) と (26) は (29a, b, c) の構造を持つ。(29a) と (29b) は補文の vP のフェイズで束縛原理 C が適用し、*he* と *John*, また *she* と *Mary* は非同一指示的であると判断される。*near John* あるいは *in John's picture of Mary* が文頭まで前置される前に判断するので正しい結果が得られる。また、(29c) においては SC のフェイズで *her* と *Mary* が非同一指示的であると判断される。このように *next to Mary's house* が前置される前に判断することにより正しい結果が得られる。*next to Mary's house* が前置された後では *her* は *Mary* を c 統御しないからである。

- (29) a. Bill said [<sub>IP</sub> [<sub>VP</sub> he saw [<sub>SC</sub> [a snake] [near John]]]]  
 b. I think [<sub>IP</sub> [<sub>VP</sub> she found [<sub>SC</sub> [a scratch] [in John's picture of Mary]]]]  
 c. [<sub>IP</sub> [<sub>VP</sub> John found [<sub>SC</sub> [her] [next to Mary's house]]]]

次に (24) を検討する。*put* は 3 項述語である。Larson (1988) は 3 項述語を含む文は VP Shell 構造を持つと主張する。(24) で *in John's bed* が前置される前の構造は (30) である。vP のフェイズの段階で *him* と *John* は非同一指示的と判断される。(なお、(30) については 3 節と 4 節でもう一度取り上げる。)

- (30) [<sub>IP</sub> [<sub>VP</sub> Sam [<sub>V'</sub> [<sub>V</sub> e] [<sub>VP</sub> him [<sub>V'</sub> put [in John's bed]]]]]]]

Reinhart の (6a, b) の説明は S 構造で判断しようとするものである。(6a, b) は説明できても、(23)～(26) を説明することはできない。特に目的語は前

置された前置詞句の中まで c 統御できないからである。

次に代名詞が目的語位置にある時、前置された PP 中にある DP と同一指示になる場合を検討する。(9a, b) と (10a) を (31a, b, c) として再掲する。Reinhart は (31a) を (4a) と同じように扱う。((4a) を (32) として再掲。) すなわち、Reinhart はどちらも S 構造で主語の *he* が *John/Dan* を c 統御するので両者は同一指示的にならない。

- (31) a. \* In John's<sub>i</sub> apartment, he<sub>i</sub> smokes pot. (= (9a))  
 b. In Mary's<sub>i</sub> apartment, a thief assaulted her<sub>i</sub>. (= (9b))  
 c. Next to Mary's<sub>i</sub> house, John kissed her<sub>i</sub>. (= (10a))  
 (32) \* Near Dan<sub>i</sub>, he<sub>i</sub> saw a snake. (= (4a))

本稿は (23a) で *Dan* と *he* が同一指示的にならないのは、*near Dan* が前置される前の段階で *Dan* が *he* に c 統御されるからであると主張してきた。では、(31a) をどのように扱うのか？ (31) は 2 項述語を含む文である。そして前置詞句は付加部である。(31a) は、「ジョンのアパートで彼はマリファナを吸った」という意味である。小節の叙述部、あるいは 3 項動詞の内項は決まった位置に生成された後、前置された。これに対し、付加部は、そのようなことはない。(31a) の *In John's apartment* は (主語の *he* が vP 指定部から IP 指定部に上昇した後)、IP に付加したと考える。(31a) は (33) の構造を持つ。

- (33) [<sub>IP</sub> [<sub>IP</sub> John's apartment] [<sub>IP</sub> he<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> t<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> smoked pot]]]]

Reinhart の (5) は正しいと考えるので、*he* は *John* を c 統御する。従って、(31a) で *John* と *he* は非同一指示的になる。(31b, c) は (34a, b) のような構造を持つ。

- (34) a. [<sub>IP</sub> [<sub>IP</sub> Mary's apartment] [<sub>IP</sub> a thief [<sub>VP</sub> t [<sub>VP</sub> assaulted her]]]]

- b. [<sub>IP</sub> [Next to Mary's house] [<sub>IP</sub> John [<sub>VP</sub> *t* [<sub>VP</sub> kissed her]]]]

(34a, b) とも *her* は *Mary* を *c* 統御していない。このように前置詞が付加部の場合も正しい解釈が得られる。

Reinhart は (31a) のような前置詞句が付加部の場合と (23)～(26) のような知覚動詞あるいは VP Shell を含む場合と同じに扱っている。しかし、Lakoff (1968: 22) は (31a) を容認する方言が存在すると述べている。そして Lakoff は、(31a) を容認する人も (23a) を容認しないと述べている。((31a) と (23a) を (35), (36) として再掲。) 両者を同じに扱うとこのような方言の存在を説明できない。両者を別に扱うと、このような方言の存在があっても不思議ではない。

- (35) \* In John's<sub>i</sub> apartment, he<sub>i</sub> smokes pot.

- (36) \* Near Dan<sub>i</sub>, he<sub>i</sub> saw a snake.

中村 (1996) は (37) のように意味内容が豊かな前置詞句は、場面設定の機能を持つようになり、IP の外に生成されると主張する。(34) を許す方言話者は、前置詞句の意味内容が豊かでなくても場面設定の機能を持つことを許しているのかもしれない。そうすると (34) の *In John's apartment* は IP の外に生成され、*he* が *John* を *c* 統御することはない。

- (37) In John's<sub>i</sub> apartment near the railroad tracks in the Pamrapo district of Bayonne, N. J., he<sub>i</sub> smokes pot. (Lakoff 1968: 13)

### 3. 代名詞と再帰代名詞

束縛原理 A と束縛原理 B をもう一度述べる。

- (38) a. 束縛原理 A : もし  $\alpha$  が照応形であるならば, 領域 D において  $\alpha$  を c 統御する句と同一指示的であると解釈せよ。
- b. 束縛原理 B : もし  $\alpha$  が代名詞類であるならば, 領域 D において  $\alpha$  を c 統御するすべての句と非同一指示的であると解釈せよ。

束縛原理 A と束縛原理 B は, ある句と同一指示的である照応形が生起可能である場所では, その句と同一指示的である代名詞は生起できないと述べている。すなわちある句と同一指示の照応形と代名詞は相補分布をなすと主張している。(39a) と (39b) で *himself* と *him* は同じ位置にある。(39a) の *himself* は *John* と同一指示でなければならないが, (39b) の *him* は *John* と非同一指示的である。

- (39) a.  $\text{John}_i \text{ hates himself}_{i/\neq i}$ .
- b.  $\text{John}_i \text{ hates him}_{\neq i/j}$ .

しかし, 照応形と代名詞が同じ位置で同じ先行詞と同一指示が可能な場合が観察されている。1 つは (40) のような場合であり, (40a) の *himself* も (40b) の *him* も *John* と同一指示的であるという解釈が可能である。

- (40) a.  $[_{IP} \text{John}_i \text{ likes } [_{DP} \text{stories about himself}_i]]$
- b.  $[_{IP} \text{John}_i \text{ likes } [_{DP} \text{stories about him}_i]]$

Chomsky and Lasnik (1993) は (40a), (40b) のような例を束縛原理 A, B の例外とせず, 束縛原理 A, B の適用の仕方を考えることにより, (40a) と (40b) を束縛原理 A, B で説明する。(40) と (41) を比べよう。(41a) では *himself* が *John* と同一指示である解釈は不可能で, *himself* は *Bill* しか指さない。

(41b) では *him* が *Bill* と同一指示である解釈は不可能で, *him* は *John* (あるいは別の男性) しか指さない。(40b) と (41b) は平行的である。また, (41a) は束縛原理 A が予測する通りである。従って, 説明すべきは (40a) ということになる。

- (41) a.  $[_{IP} \text{John}_i \text{ likes } [_{DP} \text{Bill}'s_i \text{ stories about himself}_{i/i}]]$   
 b.  $[_{IP} \text{John}_i \text{ likes } [_{DP} \text{Bill}'s_i \text{ stories about him}_{i/*i}]]$

Chomsky and Lasnik (1993) はこの問題を次のように考える。(41a) の場合, *himself* を c 統御する *Bill* が DP の中にあり, 束縛原理 A を適用できる。しかし, (40a) では *himself* を c 統御するものが DP の中にない。従って, DP の中では束縛原理 A を適用しようとしても適用できない。そして Chomsky and Lasnik (1993) は「領域 D」を次のように定義する。

- (42) その中で束縛原理が原理的に満たされ得る最小の完全機能複合である<sup>7)</sup>。

(42) の定義によれば, (40a) の DP は領域 D にはならず, IP が領域 D になる。そして正しく *John* と *himself* は同一指示と解釈される。これに対し (40b) は代名詞が関わるので, 束縛原理 B が適用する。束縛原理 B の適用には先行詞を必要としない。(40b) の DP で束縛原理が原理的に満たされることができ, DP が領域 D になる。(40b) が正しく説明される。(41a, b) と同領域 D は DP である。以下, 領域 D を下線で示す。

- (43) a.  $[_{IP} \text{John}_i \text{ likes } \underline{[_{DP} \text{ stories about himself}_i]}]$

7) ある主要部と整合するすべての文法機能を含む投射を, 完全機能複合という。

- b. [<sub>IP</sub> John<sub>i</sub> likes [<sub>DP</sub> stories about him<sub>i</sub>]]

- (44) a. [<sub>IP</sub> John<sub>i</sub> likes [<sub>DP</sub> Bill's<sub>i</sub> stories about himself<sub>i/j</sub>]]

- b. [<sub>IP</sub> John<sub>i</sub> likes [<sub>DP</sub> Bill's<sub>j</sub> stories about him<sub>i/\*j</sub>]]

以上が Chomsky and Lasnik (1993) の説明である。

もう 1 つの場合は, (45), (46) のような文である。

- (45) a. Max<sub>i</sub> rolled the carpet over him<sub>i</sub>. (Reinhart and Reuland 1993: 687)

- b. Max<sub>i</sub> rolled the carpet over himself<sub>i</sub>. (Reinhart and Reuland 1993: 68)

- (46) a. John<sub>i</sub> put the carpet over him<sub>i</sub>. (Hestvik 1991: 462)

- b. John<sub>i</sub> put the carpet over himself<sub>i</sub>. (*ibid.*)

一般に 3 項述語の場合で, 他の句と同一指示の場合は (47) のように再帰代名詞が使われる。

- (47) a. I showed<sub>i</sub> John himself<sub>i</sub> (in the mirror).

- b. I showed<sub>i</sub> John to himself<sub>i</sub>.

- (48) a. Lucie<sub>i</sub> explained Max to \*her<sub>i</sub>/herself<sub>i</sub>.

- b. Lucie<sub>i</sub> explained Max to \*him<sub>i</sub>/himself<sub>i</sub>.

従って, 特別に説明すべきは (45a), (46a) である。(45a)/(46a) と (47)/(48) の違いは, 前者には「場所」の概念があることである。Wilkins (1988: 198) は (45a)/(46a) のような場合, *the carpet* と PP (*over him*) の間に叙述の関係があると主張する。本稿は, この主張を取り入れて, (45a)/(46a) のような場合, *the carpet* と *over him* が小節を成すと主張する。(45a) は (49) のよ



うな構造を持つ。

(49)  $[_{IP} [_{VP} Max_i [_{V'} V [_{VP} rolled [_{SC} [_{DP} the\ carpet] [_{PP} over\ him_i]]]]]]]$

小節をフェイズと考えるので、(49)で *him* は許される<sup>8)</sup>。そして *Max* と（あるいは別の男性）と同一指示となることが許される。なお、Wilkins はこのような場合、叙述は随意的であると主張している。もし叙述の関係が形成されないと、(50) のように普通の 3 項述語の構造を持つ。*Max* と *himself* が同一のフェイズの中にあり、*himself* と *Max* は同一指示的となる。このように考えると、再帰形と代名詞が同じ位置に生起しても、束縛原理 A、束縛原理 B の例外とはならず、束縛原理 A と束縛原理 B は維持できる。

(50)  $[_{IP} [_{VP} Max_i [_{V'} [v\ e] [_{VP} the\ carpet\ [_{V'} rolled\ [over\ himself_i]]]]]]]$

#### 4. 残された問題—意味の問題

Cantrall (1974) は興味深い事実を指摘している。今、美術館で大人の人が描かれた絵を見ているとする。そして絵の中の大人は絵を見ている人に背を向けているとする。さらに絵の中で大人は子供を連れているとしよう。Cantrall は (51a) には 1 つの解釈しかないと主張する。向うを向いた大人が自分の後ろに子供を置いている場合である。すなわち、子供が向うを向いた大人の後ろに、すなわち、絵を見ている人の側にいる場合である。そして Cantrall は、(51b) の文は二通りに解釈できると述べる。1 つは、(51a) と

8) 小節の主語位置に来る DP は目的格照合のため、小節の外へ移動する。(上記の PIC により、小節の指定部は小節の外のフェイズにおける操作に関わることができる。) 従って、小節の主語と主文の主語が同一指示である場合は、再帰代名詞でなければならない。

(i) *Max<sub>i</sub> rolled himself<sub>i</sub> over the carpet.*

同じ解釈，すなわち，子供は絵を見ている人の側にいる。もう1つは，向うを向いた大人が自分の前に子供を置いている場合である。この場合は，子供は絵を見ている人から見て，大人の向こう側にいる。

- (51) a. The adults in the picture are facing away from us, with the children placed behind themselves.  
b. The adults in the picture are facing away from us, with the children placed behind them.

これは興味深い事実である。なぜ再帰代名詞を使った時は1つの解釈のみ可能で，代名詞を使った時は2つの解釈が可能であるのだろうか。この事実は束縛原理 A と束縛原理 B で説明できるのであろうか。

さらに，Kuno (1987) も同じような例を挙げている。そして Kuno は (52a) はジョンが本を手持って自分の後ろに持っていった場合で，本はジョンに直接触っていると述べる。しかし (52b) では本は例えば，椅子の上にあり，ジョンは椅子の前に立って本を見えなくしている時に使える。この場合，この文は，本とジョンが接触しているということを言明していないと Kuno は述べる。また，Kuno は (53a) は，ジョンが毛布を手で持って，（例えば，隠れるために）体全体にかけたことを意味すると述べる。(53b) はジョンの体全体をターゲットにする行為を意味せず，例えば顔が毛布から出ていると使えると Kuno は述べる<sup>9)</sup>。さらに，Kuno は，(54a) では毛布はジョンに接触しているが，(54b) にはそのような含意はないと言う。

- (52) a. John<sub>i</sub> hid the book behind himself<sub>i</sub>.  
b. John<sub>i</sub> hid the book behind him<sub>j</sub>.

---

9) Reinhart and Reuland (1993) も Hestvik (1991) もそれぞれ (45a, b), (46a, b) に関し，意味の相違については触れていない。

- (53) a. John<sub>i</sub> pulled the blanket over himself<sub>i</sub>.  
 b. John<sub>i</sub> pulled the blanket over him<sub>j</sub>.  
 (54) a. John<sub>i</sub> put the blanket next to himself<sub>i</sub>.  
 b. John<sub>i</sub> put the blanket next to him<sub>j</sub>.

そして Kuno は (55) のような再帰代名詞に対する意味的制約を提唱する。

- (55) 英語の再帰代名詞は、それが、文の表す行動の直接的な受け手がターゲットである場合に、そしてそのような場合でのみ使用できる。

しかし、再帰代名詞に対する意味的制約は必要であろうか？ 束縛原理 A と束縛原理 B で説明できないであろうか。その検討を行う前に事実を検証すべきであろう。ネイティブインフォーマントによれば、(52b) は、(52a) が使用される状況、すなわちジョンが本を手にとって自分の後ろに持っていた場合でも使えるとのことである。すなわち、再帰代名詞を使った (52a) には 1 つの解釈しかないが、代名詞を使った (52b) には 2 つの解釈がある。そして、これは (51a, b) についての Cantrall の主張と並行的である。同様にネイティブインフォーマントによれば (53b) は、(53a) が使える状況、すなわち、毛布でジョンの体全体を覆った場合でも使用できるとのことである。再帰代名詞を使った (53a) には 1 つの解釈しかなく、代名詞を使った (53b) には二通りの解釈がある。これも Cantrall の (51a, b) と並行的である。さらに、ネイティブインフォーマントによれば、(54a) で毛布は必ずしもジョンと接触していなくても良いとのことである。Cantrall も (51a) で子供が大人と接触しているとは言明していない。

以上で、事実が整理できたと思われる。この意味の問題を束縛原理 A と束縛原理 B から導くことができるであろうか？ 代名詞を使った場合を先

に検討する。(45a) では *the carpet* と PP (*over him*) の間に主語と叙述の関係があると述べた。((45a) を (56a) として再掲。) そして主語と叙述の関係を表すため, *the carpet* と PP (*over him*) が小節を成すと主張し, (45a) の構造は (49) であると主張した。((49) を (56b) として再掲。) (57) で項は主語の *the adults* と *the children behind them* という小節の2つである。*the children* も *behind them* も項ではない。(57) で小節はマックスが転がした結果のカーペットの場所(すなわちマックスの上)を示す。また (51b) を修正した (57a) は (57b) の構造を持つ。(57b) は大人の行為の後の子供の位置を示す。子供が、向うを向いている大人の後ろ、すなわち、見ている人の側にいても「子供は彼らの後ろ」にいる。また、子供が、向うを向いている大人の前に、すなわち見ている人から見たら、大人の後ろにいても見ている人には「子供は彼らの後ろ」にいる。(52b) においてもジョンが隠す行為をした後の本の位置を示す。((58a) として再掲。構造は (56b), (57b) と並行的であるので省略。) 本を体の後ろに持っていても、本の手前に立っても、「本は彼の後ろ」にある。(53b) = (58b) においてもジョンが引っ張った後に毛布がジョンの体全部を覆っていても、顔が毛布から出ている、「毛布は彼の上にある」。(54b) = (58c) においても「毛布は彼の隣に」ある。

- (56) a. Max<sub>i</sub> rolled the carpet over him<sub>i</sub>. (= (45a))  
 b. [<sub>IP</sub> [<sub>VP</sub> Max<sub>i</sub> [<sub>V'</sub> v [<sub>VP</sub> rolled [<sub>SC</sub> [<sub>DP</sub> the carpet] [<sub>PP</sub> over him<sub>i</sub>]]]]]] (= (49))
- (57) a. The adults<sub>i</sub> placed the children behind them<sub>i</sub>.  
 b. [<sub>IP</sub> [<sub>VP</sub> the adults<sub>i</sub> [<sub>V'</sub> v [<sub>VP</sub> placed [<sub>SC</sub> [<sub>DP</sub> the children] [<sub>PP</sub> behind them<sub>i</sub>]]]]]]
- (58) a. John<sub>i</sub> hid the book behind him<sub>i</sub>. (= (58a))  
 b. John<sub>i</sub> pulled the blanket over him<sub>i</sub>. (= (53b))  
 c. John<sub>i</sub> put the blanket next to him<sub>i</sub>. (= (54b))

以上のように、代名詞を使用した場合の意味解釈は、DP と PP が小節を構成して、両者の間に叙述の関係があると考えれば表すことができる。(なお、上述のように小節がフェイズであると考え、ここに代名詞が生起できることが説明できる。)

次に再帰代名詞を使った場合を考える。2 節で (45a) = (59a) は (50) = (59b) の構造を持つと述べた。(51a) を修正した (60a) は (60b) の構造を持つ。

- (59) a.  $\text{Max}_i$  rolled the carpet over himself<sub>i</sub>. (= (59a))  
 b.  $[_{IP} [_{VP} \text{Max}_i [_v [_v \text{e}] [_{VP} \text{the carpet} [_v \text{rolled} [\text{over himself}_i]]]]]]]$  (= (50))
- (60) a. The adults<sub>i</sub> placed the children behind themselves<sub>i</sub>.  
 b.  $[_{IP} [_{VP} \text{the adults}_i [_v [_v \text{e}] [_{VP} \text{the children} [_v \text{placed} [\text{behind themselves}_i]]]]]]]$

(60b) で項は *the adults* と *the children* と *behind themselves* の 3 つである。(このことと、小節を含んだ (57b) では *the children* も *behind him* も項ではないことと対比されたい。) そして *the adults* と *themselves* は同じフェイズの中にあるので、*themselves* は束縛原理 A により *the adults* と同一指示的であると解釈される。また、*the children* も *behind themselves* も *place* という動詞の項であるので、大人は子供に直接の対象として大人の後ろに隠すことを示す。向うを向っている大人が自分の後ろ、すなわち見ている人の側に隠す場合を示す。この文は見ている人から見て大人の向こう側に隠す場合を表していない。その場合、大人は自分の前に子供を隠したことになるからである。(52a) = (61) も同じである。小節を含む場合と違って、この場合 *the book* と *behind himself* は *hide* という動詞の項である。ジョンが本を直接の対象としてジョンの後ろに隠したのであるから、ジョンは本を手持ってジョンの後ろに持って行くことを示す。本が椅子の上にある時に相手と本の間に身を置いたのでは、本を直接の対象として動作をしたことにはならない。

(61) John<sub>i</sub> hid the book behind himself<sub>i</sub>. (= (52a))

以上のように代名詞を含む場合は小節構造を成す。小節はフェイズであるから文の主語と代名詞は別のフェイズに属する。束縛原理 B によりフェイズの外にある DP と同一指示的である代名詞が生起することが許される。そして小節はその主語と PP が場所の叙述をする。このことから Cantrall, Kuno が指摘する意味を表すことができる。また、再帰代名詞を含む場合は VP Shell の構造をしており、文の主語と再帰代名詞は同じフェイズの中にある。束縛原理 A により文の主語と再帰代名詞が同一指示的であることが許される。また、小節を含む場合とは違って、場所の叙述はなく、文の主語は直接目的語を直接の対象として動作を行う。このことから Cantrall, Kuno が指摘する意味を表すことができる。

Kuno の再帰代名詞に対する意味的制約 (55) = (62) をもう一度考えよう。本稿は次の 2 つの主張をする。(1) 場所の叙述を表す場合は小節構造を含み、束縛原理 B により代名詞の生起が許される。(2) 文の主語が 2 つの項に直接行動をする場合は、VP Shell 構造を含み、束縛原理 A により再帰代名詞の生起が許される。以上の 2 つの主張をすれば、Kuno の意味的制約は束縛原理 A と B から自動的に導きだされる。束縛原理 A と B の他に意味的制約は必要ないということになる。

(62) 英語の再帰代名詞は、それが、文の表す行動の直接的な受け手かターゲットである場合に、そしてそのような場合でのみ使用できる。(= (55))

最後に (53a) = (63) を考えよう。この文はジョンが毛布をジョンの上に引っ張るという行為をしたことを示す。そして、この場合その行為が完了していることを示している。毛布を首のあたりまで引っ張った場合、毛布をさらに

引っ張る続けることが可能である。その意味で、毛布を首のあたりまで引っ張っただけでは毛布をジョンの上まで引っ張るという行為は完了していないということになる。従って、ジョンの顔が毛布からはみ出ている場合では(63)が使用できないことになる。Kunoの(62)においても「直接的な受け手かターゲット」と述べられているだけであり、その結果体全体が覆われているという表現は直接的には述べられていない。

(63) a. John<sub>i</sub> pulled the blanket over himself<sub>i</sub>. (= (53a))

## 5. まとめ

以上、束縛原理 A, B, C について述べて来た。束縛原理 C についてはフェイズごとに適用すると考えることにより、多くの言語事実が説明できると主張した。また、束縛原理 A, B については、場所を含む 3 項述語の場合は、主語と場所を叙述する小節構造を含む場合と場所を叙述しない VP Shell の場合があり、前者には代名詞が、後者には再帰代名詞が使われると述べた。さらに、Cantrall と Kuno が述べる代名詞を使った場合と再帰代名詞を使った場合の意味意味的相違は束縛原理 A と B から導かれるので、Kuno の再帰代名詞に対する意味的制約は不要であると論じた。

## 参考文献

- 有元将剛・村杉恵子 (2005) 『束縛と削除』(英語学モノグラフシリーズ 12) 研究社, 東京.
- Cantrall, William R. (1974) *Viewpoint, Reflexives, and the Nature of Noun Phrases*, Mouton, The Hague.
- Chomsky, Noam (1993) "A Minimalist Program for Linguistic Theory," *The View from Building 20*, ed. by Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA. [Reprinted in Noam Chomsky (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge,

MA.]

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (2000) “Minimalist Inquiries: The Framework,” *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin et al. 89–155, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (2001) “Derivation by Phase,” *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1–52, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (2008) “On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero, and Maria Luisa Zubarrreta, 133–166, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam and Howard Lasnik (1993) “The Theory of Principles and Parameters,” *Syntax: An International Handbook of Contemporary Research* Vol. 1 ed. by Joachim Jacobs et al. 506–569, Walter de Gruyter, Berlin. [Reprinted in Noam Chomsky (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.]

Guéron, Jacqueline (1984) “Topicalization Structures and Constraints on Coreference,” *Lingua* 63, 139–174.

Hestvik, Arild (1991) “Subjectless Binding Domains,” *Natural Language and Linguistic Theory* 9, 455–497.

Kuno, Susumu (1987) *Functional Syntax: Anaphora, Discourse and Empathy*, University of Chicago Press, Chicago.

Lakoff, George (1968) “Pronoun and Reference,” distributed by Indiana University Linguistics Club.

Larson, Richard K. (1988) “On the Double Object Construction,” *Linguistic Inquiry* 19, 335–391.

Lebeaux, David (1988) *Language Acquisition and the Form of the Grammar*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts.

Lebeaux, David. (1991) “Relative Clauses, Licensing, and the Nature of the Derivation,” *Syntax and Semantics 25: Perspectives on Phrase Structure: Heads and Licensing*, ed. by Susan Rothstein, 209–239, Academic Press, San Diego.

Lebeaux, David (1998) “Where Does the Binding Theory Apply? [version 2],” Technical Report, NEC Research Institute.

Lebeaux, David (2009) *Where Does Binding Theory Apply?* MIT Press, Cambridge, MA.



- Legate, Julie Anne (2003) “Some Interface Properties of the Phase,” *Linguistic Inquiry* 17, 421–446.
- McCawley, James D. (1998) *The Syntactic Phenomenon of English* [2<sup>nd</sup> Edition], University of Chicago Press, Chicago.
- 中村 捷 (1996) 『束縛関係一代用表現と移動』 ひつじ書房, 東京.
- 南谷 守 (2001) “Two Types of Phases and Anaphor Binding,” 日本英文学会第 73 回大会 (於学習院大学) での発表.
- Reinhart, Tanya (1979) “The Syntactic Domain of Syntactic Rules,” *Formal Semantics and Pragmatics for Natural Languages*, ed. by F. Guenther and S. J. Schmidt, 107–139, Reidel, Dordrecht.
- Reinhart, Tanya (1983) *Anaphora and Semantics*, Croom Holm, London.
- Reinhart, Tanya and Eric J. Reuland (1993) “Reflexivity,” *Linguistic Inquiry* 24, 657–720.
- Solan, Lawrence (1983) *Pronominal Reference: Child Language and the Theory of Grammar*, Reidel, Dordrecht.
- Wilkins, Wendy (1988) “Thematic Structure and Reflexivization,” *Syntax and Semantics* 21: *Thematic Structure*, ed. by Wendy Wilkins, 181–213, Academic Press, San Diego.